

九月二十五日、リルエット町でフリーマン（名誉町民のようなもの）に推挙されて表彰、晩餐会が催された。そして一九七七年、オーター・オブ・カナダ勲章が授けられた。

なお、日系人のカナダ勲章（オーター・オブ・カナダ）受勲者としては、宮崎氏のほか、故北川源蔵氏（滋賀県彦根市出身、実業家）、デビッド・スズキ氏（生物学教授、テレビ番組解説者）、トム・シヨーマ氏（前連邦政府大蔵次官）、佐藤伝氏（福島県棚倉町出身、バンクーバー日本語学校名誉校長）、桑原キナ女史（生け花師匠）などがある。

ケベックの劇作家

ミシェル・トランブレ

でっぷりとして、穏やかな人柄のミシェル・トランブレは、三十五年前モントリオールのある品の悪い街に生まれた。そこにいるのは女ばかりで若い男はごく少なかった。

街と時代と環境が彼に深い影響を与えたにちがいない。彼はケベックの指導的な劇作者への道を行っており、人生の細部にひそむ真実の力強い代弁者である。

彼の処女作「善良なる人々」は一つのセンセーションだった。明らかにその原因は、ケベックの大衆の言葉であるフランス語のケベック弁とでもいうべきジュ

アル（ケベックなまりのフランス語という意味。フランス語の馬ヘシユヴァル）がケベック方言ではジュワルと発音されるところからきている」で書かれていたからだ。それまで誰もそんなことをやってた者はいなかったのである。しかしトランブレは実はもっと重要な点でオリジナルであった。ケベックは自らの存在のアイデンティティをずっと模索しつづけていたが、この戯曲はその混乱ぶりを反映



していたのである。一人のフランス系カナダ女性が、百万枚の景品券を集めて、近所の十四人の女たちに小さなノートにそれを全部貼りつけてくれるように頼む。スタンプ自体が騒ぎの原因の一つである。数の多さはうまく仕組まれた幻影であり、小さな景品を大きく見せる。全部合わせてもたかだか千ドルの値うちしかない上に、安物のプラスチックの景品としか替えてもらえないのだ。女に仕掛けられたトリックなのである。

トランブレの近作はどれもやはり女性

の見地から書かれている。例えば「ホザンナ」の場合は、変身の世界が描かれており、男性の肉体に住む女性がそこから抜け出そうとする作品である。

ストレスの発見者

ハンス・セリエ

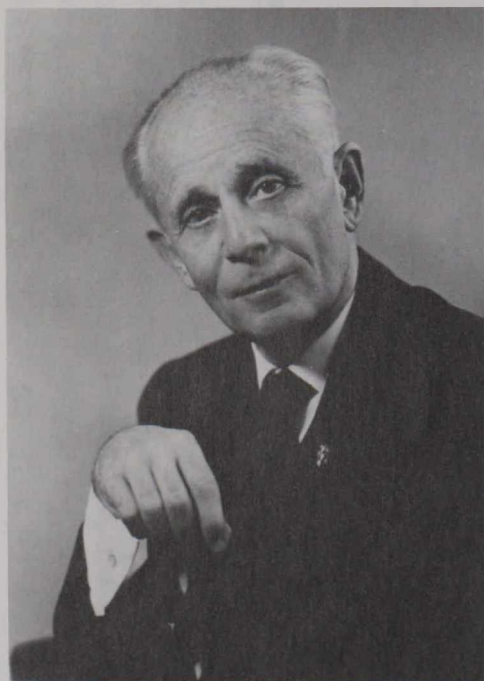
十九歳のハンス・セリエは、師であるフォン・セイセネック教授に対して次のように主張したことがある。臨床医は、気分が悪いというだけの症状にもっと気を配るべきだと思います」と。

教授の答はこうだった。「気分が悪くなれば顔に現われるものだ。それは当然のことじゃないか。肥った人が肥ってみえるのと同じだよ」

ハンスは末梢的な事実によってまよわされることなく本質を見つめる精神の持ち主だった。この時

彼は、ストレス学確立のための第一歩を人知れず歩みはじめていたのである。

十年後、彼はモントリオールのマッギル大学でJ・B・コリップ教授の助手として研究を続けていた。女性ホルモンに関する研究のなかで、



彼は屠殺後間もない牝牛の卵巣から抽出したものをメスのネズミに注入してみた。未知のホルモンによっておこるかもしれない変化を観察していたのである。ネズミは反応し、副腎の拡張とリンパ組織の萎縮、胃潰瘍が全個体にあらわれた。

さらに彼は別の組織からの抽出物を同様にネズミに注入してみた。反応はまったく同様であった。しかし、明らかに性ホルモンは何の関係もない。その時彼はあの「気分が悪いという症状」のことを思い出したのである。

今度はネズミを研究室の屋根の吹きさらしのなかに置いてみることにした。一晩中真冬の寒さのなかに放置されたネズミには、そろって同じ症候群が認められた。副腎拡張、リンパ系の萎縮、潰瘍の兆候である。彼はさらに実験を続けた。いかなる種類のストレスを与えようとネズミの反応は一樣であった。コリップ教授の方では、一度じっくり話をする必要を感じた。セリエのやり方は時間のむだ